



Title	痛みの表現
Author(s)	堀, 寛史
Citation	メタフュシカ. 2018, 49, p. 17-28
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/71241">https://doi.org/10.18910/71241</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 痛みの表現

堀 寛史

### 1 はじめに——本論出発の経緯——

私は2009年に博士課程満期退学後、長い期間、博士論文を書けずにいた。「書こう・書けない」の想いを花占いのように繰り返しているうちに、当時の主査であった中岡先生（臨床哲学的には「さん」の敬称が望ましい）の退職により、碇を失った船のように遭難状態になった。細い線で「書こう」の意思はつながっていたものの、書いても誰の審査を受ければいいのかかわからず、当時を思い返せば、ほぼ書くことを諦めていた。そして、防衛反応としての合理化により書かない理由の説明だけが積み重なっていった。書くことも書かないことも精神的疲労は大きく、表面的には元気な姿を装っていたが、現状を打破できない不安と共に生きていた。

2015年2月に理学療法学の師匠である奈良勲先生が私のていたらくぶりを見かねて、浜渦先生に博士論文の審査員になっていただくよう依頼してくださった。それを浜渦先生が受けてくださり、その話を聞いたときに、私の「書こう」という意思の線が強い力で引っ張られた。これまで書けなかったのだから、意思を持ったとしても急に文章が進むわけではなく、執筆準備に1年、執筆に1年2ヶ月かかった。2年以上の間、浜渦先生には丁寧な指導を頂き、励まされ、どうにか博士論文を執筆し2017年4月に提出、7月に博士の学位取得となった。浜渦先生には失いかけた意思をつないでいただき、大げさでは無く命を救われたと感じている。感謝を表す最上級のことばについて調べてみたが、どれも私の心情に当てはまらない。今回、浜渦先生が退職され、その記念号が出版されると聞き、書くことにより恩返しができるならと考え、本論を執筆した。

私の博士論文題目は「痛みの存在意義——臨床哲学と理学療法学の視座——」である。その中で、痛みの表現について十分に論じていなかった。痛みは個人の感覚・情動的経験であるため共有不可能であると考えられている。そのため、痛みについて考えるにはどのように表現され、他者と共有しようとするのかを知る必要がある。特に理学療法士にとって、他者の痛みは重要な治療対象であるため、さまざまな方法で検査し評価する。医療は他者の痛みを知りたがっている。

論文執筆は筆者である私の作業であり、進むのも止まるのも、意思するのも、諦めるのも自分

の判断となる。通常、人は苦痛から逃れようとする本性が備わっている。書くことは楽な作業では無く、論文執筆の最中はいつも魂が特別なスライサーによって薄く削り取られる感覚がある。続かない集中力と書いては消すパソコン上の文字、そして、頭の中にあると信じてことばを探し続け、自問自答し、そして何度も自己否定する。これは自傷行為のような時間である。執筆作業は苦悩である。

博士論文の中で導き出した痛みの存在意義は「痛みとは、身体が生きていることを求めようとする心身への不快な働きかけ」である。博士論文の執筆を通して身体は「生きよう」としていると気づいた。社会において生きる意味や存在意義を確定することは社会と自己自身の変化によって安定せずに難しいのだが、生物の本性として少なくとも身体は常に生きることを求めている。それは生かされているのではなく、身体の意志として生きているのである。苦悩を覚えている間、我々は生きている。また同時に身体はそれを避けようとし、心身を安定させようとする。執筆作業の苦悩から逃れたいと心身が望んでいるが、自己対話を通して、アクチュアルに私の存在を認識できる。苦悩を通して生きている実感が確かにある。

博士論文執筆を通して、他者に私の考えを伝えることが少人数であれ達成できた。誰かに何かを伝えるときにはことばや表情、動きなど様々な方法で表現しなければならない。痛みは不快感を伴い、多くの人にとってその経験を望ましく思わない。また痛みは身体の動きを制限し、さらに理由の不明確な痛みは不安を惹起させる。痛いという感覚的经验はほとんどの場合しばらくすれば治まるとじっとしてやり過ごす、またいつか痛むのではないかと不安を覚える。このような痛みは誰かに依頼して解決したいと願う。

痛みは個人の感覚的・情動的経験であるため表現されてはじめて他者と共有する準備ができる。本来、痛みは共有できないはずであるのだが、表現することによって痛みの意味を知る糸口になる可能性がある。ハンナ・アーレントは大きな身体的苦痛の経験を「すべての人の中で最もプライベートで、最もコミュニケーションが難しい」<sup>1</sup>と述べており、個人の中で孤立する可能性を示唆している。またエレン・スカリーは「痛みは単に言語に抵抗するのではなく、言語を破壊する力がある」<sup>2</sup>とし、そもそも表現すらさせないと述べている。他者の痛みを知ろうとする挑戦はかなりの難問である可能性がある。

本論では着実に表現を拾い上げ、共通不可能な痛みについて考える。切り口として、痛みの表現方法は大きく分けてオノマトペと比喩表現に分かれるとされており、その2つについて考え、痛みの表現について紐解いていく。

## 2 オノマトペ

理学療法士において問診は痛みの表現を取り出すための診察方法の一つである。当然のことであるが、対象者にどこがどのように痛いのか問い、それについて回答してもらう。これは検査と

---

<sup>1</sup> Arendt, Hannah, *The Human Condition*, Chicago: The University of Chicago Press, 1958.

<sup>2</sup> Elaine Scarry, *The Body in Pain: The Making and Unmaking of the World*, New York: Oxford University Press, 1985.

して優先順位の高い方法である。さらに問診をしている際に対象者を観察<sup>3</sup>し、痛みの身体表現を診る。専門性の高い理学療法士であれば、この問診と観察により多くの情報を引き出すことができる。

『ペイン 臨床痛み学テキスト』では「痛みの測定を包括的でありながら無駄のないものとするために（特に他の測定法が必要でない限り）、3つの面（言葉による痛みの表現、痛みに対する反応、痛みによる影響）のそれぞれから一つずつ測定ツールを選ぶことが賢明である」<sup>4</sup>と述べている。「3つの側面」はいくつかの測定ツール（検査方法）の選択によって確認するのであるが、問診と観察はどの検査においても併用される方法である。ただし、問診には医療者の技能によって引き出せる内容が異なり、客観性と再現性に差が出る。さらにデータ収集の効率化と正確性に課題が残るため、『ペイン 臨床痛み学テキスト』では選択されるべき測定ツールについて「短くて効率が良く、利用できる情報を最大限に集めることができるような測定方法が適している」<sup>5</sup>と述べている。医療は治癒、改善、解消への変化を求められる。治療介入のアウトカムの指標として効率化と正確性を目的に、また、可能な限り客観化するために質問紙や Visual analogue scale<sup>6</sup>（以下 VAS）などを使用して系統的かつ数量的項目に表そうと試みられる。この試みは痛みを確認するためには欠かせない。

先にも述べたが、問診や観察の技術の差、評価者の解釈の差、さらに、決められた短い時間の中で必要である内容を聴き出すことの困難さについて臨床的な解決策を提示することは難しい。いくら数量化を試みてもその解釈は経験の差によって意図のくみ取りが変化する。そこに臨床の経験を通して、自己のデータベースを解釈し、正確性が成長することが大きく関与している。そのような意味から臨床経験の浅い初学者は丁寧な問診が必要であると知りつつ、いつの間にか痛みの検査の優先順位が下がってしまい、わかりやすい検査（行いやすく、解釈しやすい）と治療に時間と考えが移行する。

経験の差を如実に確認できるのが臨床経験のある理学療法士と経験の少ない臨床実習における学生の痛みの評価の比較である。痛みを「3つの側面」から捉えるために問診と観察に加えて測定ツールによる検査が推奨されている。しかし、学生が行う検査は対象者から簡単に回答が得られる Numerical Rating Scale（NRS）<sup>7</sup>もしくは VAS である。臨床経験の少ない学生は NRS や VAS を通して対象者の主観を捉えられると考えている。また、対象者の訴えを聞き取る労力よりも数値化によりデータを読み取りやすいと考えている。しかし、NRS や VAS は主観的痛みの程度を数値化したに過ぎず、部位や頻度、さらには3つの側面の解釈は含まれない。

<sup>3</sup> 例えば、初診の評価の際に対象者の歩いている姿などから異常性を判断することをいう。

<sup>4</sup> Anita M. Unruh はか（熊澤孝朗監訳）、『ペイン 臨床痛み学テキスト』、エンタプライズ、2007、p.145。

<sup>5</sup> 同上、p.145。

<sup>6</sup> 紙に 10cm の線を引き、左端を最小、右端を最大とし、主観的な状況でもっとも当てはまる位置にチェックを入れる。検査者はそのチェックをいれた部分をミリ単位で計測し、点数化する。この検査方法の利点は、被検査者が数値などであれば前回の状況を憶えており、その数値との差から現状を評価するのに対し、VAS ではビジュアルであるため前回との差が明確ではなく、より主観情報が表現されやすいとされている。

<sup>7</sup> NRS は、痛みを 0 から 10 の 11 段階に分け、痛みが全くないのを 0、考えられるなかで最悪の痛みを 10 として、痛みの点数を問うものである。

痛みを数値によってのみ表現することだけでは十分に検査できたとは考えられない。学生にとって対象者に痛みがあるとわかっているものの、不十分な検査により、痛みはいつしか忘れ去られてアプローチの対象とならないと判断されてしまう症例報告<sup>8</sup>が頻回にある。また対象者にとって痛みは代表的な主訴であるため、対象者と理学療法士（学生）の解釈に大きな溝ができ、不十分である場合は不信を招く。

対象者への治療を多く経験すると痛みが主たる課題としてあり、重要なアプローチのポイントであることを知る。よりよい治療のために詳細に痛みの情報が必要になるため、痛みに対する評価は慎重に行うようになる。その際に、重要なのが、先に述べた言葉による痛みの表現、痛みに対する反応、痛みによる影響の3つである。

学生との検査方法の違いの一つとして理学療法士は多くの整形外科的テスト<sup>9</sup>を駆使して、痛みの誘発を行う。これは痛みに対する反応を確認するためであり、経験の多いセラピストはこの手技の技術が高く、そのため、痛みの評価が適切になる。このように対象者の痛みを評価する方法は理学療法士の経験の差に委ねられている。

では、経験の差を埋めるための努力として学生や初学者が行うべき検査は何であろうか。痛みを評価する際に見るべき要素である、言葉による痛みの表現、痛みに対する反応、痛みによる影響のうち、表現についていくつかの検査方法があり、『ペイン 臨床痛み学テキスト』<sup>10</sup>を見てみると痛みの表現に注目して検査する質問紙、「マギル疼痛質問票（McGill Pain Questionnaire）」（以下、アンケート）が紹介されている。このアンケートでは、痛みを口語的な表現を用いて評価する。表現の採用にあたっては、痛みを特徴付ける単語として、痛みを発する代表的な8種類の疾患<sup>11</sup>の対象者の33%以上が選んだ単語を使用している<sup>12</sup>。無作為に選ばれた対象者による口語表現を集めたアンケートは、言語表現上の文化的相対性を含んではいるが、有用性は高い。また、「臨床家にとって本来の価値は、人の痛みの質的な特徴を確認することであり、劇的でない微妙な臨床的变化を検出することである」<sup>13</sup>ため、表現を知るために痛みのある状況の評価できる。それがこのアンケートの特徴といえよう。さらに「痛みの記述表現の包括的な測定は、自分の痛みについて充分に話せたと対象者に感じさせることができ、また、対象者が感じていることの理解に役に立つ」<sup>14</sup>と述べている。しかし、アンケートには日本語表現にはなじまない表現が多く、単なる翻訳では適用が困難である。そのため、言語的な違いがあるがアンケートは有効であるため、日本語表現に特徴的な「オノマトペ」を付け加えることにより使用可能だと考えられる。

オノマトペとは擬音語、擬声語、擬態語をまとめたものとして考えられている。オノマトペの語源はフランス語の *onomatopée* であり、字義的には「造語する」、「名前を作る」という意味に

<sup>8</sup> 臨床実習で担当した症例の評価と治療内容の学生によるプレゼンテーションを指す。

<sup>9</sup> 靱帯や腱、神経などに物理的ストレスを与え、症状を誘発する特殊なテストをいう。

<sup>10</sup> Anita M. Unruh, 前掲書, p.153.

<sup>11</sup> ヘルペス後神経痛、幻影肢痛、転移痛、歯痛、関節円板の変性疾患、リウマチあるいは骨関節炎、分娩痛、月経痛の8種類としている。

<sup>12</sup> R.Melzack, P.D.Wall, 中村嘉男訳, 『痛みへの挑戦』, 誠信書房, 1986, p.60-61.

<sup>13</sup> Anita M. Unruh, 前掲書, p.155.

<sup>14</sup> 同上, p.156.

なる<sup>15</sup>。このオノマトペは、日本文化の中で特に使用され、中世、近世の時代の文献の中にもその表現が出現する<sup>16</sup>。諸外国においては動物の鳴き声などの表現に使われる程度で、痛み表現などにオノマトペを使用することはほとんど無い。英語では、痛みを表現する際に“piercing”（突き刺すような），“biting”（噛みつく）などを使用する。これは隠喩や換喩——メタファー——<sup>17</sup>である。

日本語は幅広い表現（特に形容表現）が可能な言語である。短い文章で心象を表現することができ、情景を説明するという文化——短歌や俳句——を持ち、そのことから考えると自らの感覚に関する表現も同様に簡潔なことばや独特の単語を使用して表すことが可能であるであろう。しかし、実際に使用される痛み表現は必ずしも隠喩や換喩といったメタファーで説明されるものではない。実際に、臨床場面がよく耳にする表現はオノマトペであり、痛みを相互に理解する際には有効な手段として、オノマトペは文化的に定着している表現のようである。

対象者が痛みを表現する際には「ずきずき」痛む、「じーン」と痛むといったオノマトペで表現されることが多い。逆に評価者が「ずきずきしますか」と問診する場面もある。これは痛みの表現として、暗黙のうちに共有された「音」である。前日に運動をして、朝起きた際に体中に筋肉痛が起きていた場合、体動する際に痛みが走る。起き上がる際には腹筋に「ずきっ」とした痛みが走る。その痛みとともに思わず「あいたっ」と声上がる。筋肉痛を起こした腹筋の痛みは「じーン」でも「ずきずき」でもなく、体動に合わせて「ずきっ」の表現がよく分かる。また、風邪を引いて脈打つような頭痛を起こしている場合、その痛みは「がんがん」であって、「ちくちく」や「しくしく」ではない。このように状態を表したようなオノマトペを我々は共有している。複雑な文学表現よりオノマトペの音の感覚は日常的である。子供が自動車をブーブーと言い、犬をワンワンと呼ぶのは、物の意味を音と捉え、容易に表現できるからであろう（親がそのように教えることもある）。誰にでも容易に共有される音の表現は痛みを表現する上でも有用である<sup>18</sup>。

『オノマトペ辞典』によると痛みに関係するオノマトペは44種類とされている<sup>19</sup>。その中にはどのような場面で使用できるかよくわからない表現はあるものの、かなりの数の表現がある。この表現が伝わってくるのは我々日本人が歴史の中でオノマトペ使ってきた証であり、痛みを表現し、誰かに伝えるための手段としては非常に有用であるからであろう。

楠見孝らの研究<sup>20</sup>によると痛みの表現方法を比喩表現とオノマトペ合わせて98種類（比喩表現58例、オノマトペ40例）選び出し、「痛みの強さ」、「広いー狭い」、「鈍いー鋭い」の成分に

<sup>15</sup> 小学館ランダムハウス英和大辞典第二版編集、『小学館ランダムハウス英和辞典』小学館。

<sup>16</sup> 小野正弘、『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』，小学館，2007，p.7。

<sup>17</sup> 佐藤信夫、『レトリック感覚』，講談社学術文庫，1992。

<sup>18</sup> 稲原は「痛みの表現 身体化された主観性とコミュニケーション」（『現代思想』vol.39-11，青土社，2011年）の中で、英国人の夫に対してオノマトペで痛みを説明した際に理解を得られなかったとしている。マクギル疼痛質問票を日本に馴染まないと言ったように、痛みの表現には言語的な差がある。そのため、ここでの主張はあくまでも日本語圏での有用性と付け加えておきたい。

<sup>19</sup> 小野正弘，前掲書，2007，p.47。

<sup>20</sup> 楠見孝，中本敬子，子安増生，「痛みの比喩表現の身体感覚と認知の構造」，『心理学研究』，第80巻6号，2010，pp.467-475。



分類し、比喩・擬態語表現の基盤として身体性が存在していると考察している。例えば、頭に対して「ガンガン」が対応するなど、ある程度、表現と身体部位が一致するという。また、痛みは「表現に対応する過去の経験に基づいて評定される」ため、痛みの表現は「慣用句として、我々の知識にあり、それが判断や評定に反映されたと解釈できる」と説明する。つまり、痛みは成長の過程の中で表現を伴い情動に付加されるように意味を持つことになる。そして、言語理解が可能になってから数多くの痛みを経験する中で、他者との表現の共有の中で、その数が増え、より適切に伝わる表現として自己の中で捉え、また他者に伝えようとするために成長する。

表現が意味を持つことや表現を蓄積していくこと、そして表現を通して他者を知ることは痛みの自己・他者理解に重要な要素であるといえる。痛みは個人の経験であるが、知識としての言語により表現され、他者との理解の可能性が広がっていく。それは主観を超越した共通理解や共感に近づいていく。

ところで、痛みのイメージと暴力は繋がりを持っている。特に多くの古代の刑罰では身体を傷つけることにより苦しめていた。また、一般の人間関係の中でも他者を傷つけることは現代よりも頻繁に行われていた。統計を見るとヨーロッパにおいて中世後半から20世紀の間に、殺人の発生件数は10～15分の1に減少している<sup>21</sup>。中世の頃、家族や友人が殺人によって命を落とす可能性が現代よりも大幅に高かった。社会における暴力事件の減少理由をスティーブン・ピンカーは『暴力の人類史』<sup>22</sup>の中で社会における衛生レベルの向上と人類の識字能力の向上をあげている。特に識字能力の向上によって他者と現前しているものの認識やイメージの観点を共有できるようになり、そこから他者への共感性が増したことが重要なポイントである。

ヨハネス・グーテンベルクは、16世紀に活版印刷を発明して、その発展によって書物が庶民にも普及して、重要な娯楽となった。特に小説は人間としての思考性に多大な影響を及ぼした。人間は小説などを通じて、他者が思考し、感じていることなどを文字から理解し共有した。ピンカーは、これによって自分だけの考えに支配されない時代が到来したと述べている。感情をむき出しに、自分の考えだけが正しいとするのではなく、人々の痛みや苦しみを、文字を通して共感する。それによって、怒りの感情はある場面によっては不適切だと考え、誰かの哀しみを想起する。あるいは怒りの要因を思考するようになり、暴力への意思も減少した。

暴力が他者への痛みや苦しみを追体験することにより減少したことは、痛みを与える行為への言語的理解による逡巡であると言えよう。痛みを与える・与えられるとき、多くの場合、人はためらう。過去の経験に即して痛みの恐怖を思い、経験は無くとも予測できない不安により躊躇する。この根底には不快な情動的経験がある。幼少期より親子関係の中で痛みの表現を共有し、他者の痛みを追体験する。それが感情的抑制できない場合はあるにしても、不快な経験を他者にさせたくない、現代において社会秩序の安定に寄与している。

日常的によくある痛みの多くはオノマトペで表現されることが多い。しかし、身体が存在を脅かすような場合や自分ではどうすることもできないような痛みについて、比喩表現によって痛み

<sup>21</sup> スティーブン・ピンカー（幾島幸子、塩原通緒訳）、『暴力の人類史 上』、青土社、2015、pp.16.

<sup>22</sup> 同上、pp.320-326.

を表すことが多い。では、どのように表現されているのかを、次節で文学の中での表現を例に紹介する。

### 3 比喩表現

文学の中で作者は痛みについて、多様な表現で読者に伝える。しかし、文学の中で使用される痛みはオノマトペのような音を表すのではなく、その登場人物にとってどのような意味があるのかを伝える必要がある。読者にその痛みの強烈さをイメージさせ、場面を盛り上げるためにインパクトの残る表現を使う。読者は痛々しい表現を目にして、その文学に引き込まれ、どこかで経験したことがあるような事柄の比喩表現を自分のことに置き換え、その痛みで苦悩するかもしれないと思いながら内容を読み進める。

これから文学で使用された痛みの表現を幾つか紹介する。表現の違いによって痛みのイメージは大きく違い、その場面だけを並べてみるとその多様性がわかる。

#### ① 鈍い痛み

鈍い痛みとは、頭痛や腰痛に代表される重苦しい痛みである。誰もが日常生活の中で経験する鈍い痛みであるのだが、表現の方法で伝わり方が違う。以下に、3種類の頭痛の表現を示す。

「頭痛がして、どこともなく鈍い白歯で噛みつかれているような苦しさから逃れようもない重圧を感じさせる」岡本かの子『やがて五月に』（1938年）

「まるで2サイズばかり小さな帽子をかぶったように、何かが頭のまわりをしめつける」村上春樹『1973年のピンボール』（1980年）

「三本立て映画のハシゴをした時のような頭痛」干刈あがた『ウホッホ探険隊』（1983年）

これらは頭重感を伴うような頭痛についての説明をしている。オノマトペで紹介した「ガンガン」と表現されるより複雑な痛みである。登場人物は頭痛によってうっとうしく、不愉快な感覚を呈しており、それがよく伝わってくる。頭痛は致命的ではないが、気が滅入るような痛みを表現している。頭が重く、締め付けられるような感覚は、身体の損傷を知らせるのではなく、活動のモチベーションを低下させる原因になる。仕事をしようと思っても身体を休めた方がいいと考え、予定通りにことが進まない。誰かに会う約束があっても、それを先延ばしにするかもしれない。頭痛が続けば、気分は優れずに、落ち込んでいく。

鈍い痛みがあり、それがさらに持続する場合の表現を次で紹介する。

#### ② 持続痛

痛みが続くと耐えがたく、ストレスフルな状態になる。継続する期間が長ければ長いほど身体



の負担は増加し、痛みが身体にまわりつき離れず精神を疲弊させる。また痛みによってイライラした怒りの感情がわいてくる。

「ひっきりなしに身体のあちらこちらに、丁度大地震のあとに起る無数の小さな余震のように、或は頭痛が、或は神経痛が、或は歯痛が次ぎ次ぎに起った」堀辰雄『恢復期』（1931年）

「どっしりと大きくて、すべすべした痛みが、床屋の飴ん棒のようにじれったい速度でできりきりとまわっている」安部公房『第四間氷期』（1959年）

「ときとしてその痛みはすさまじく深くなる。まるで地球の中心にじかに結びついているみたいに」村上春樹『1Q84 BOOK 2』（2009年）

炎症を伴う歯痛などは持続痛であり、継続することに辟易する。「ひっきりなしに」、「じれったく」、「すさまじく」痛みが持続する。「ズキズキ」とは簡単に表現できない。痛みがいつまでもあり続けるのではないかと不安になる。

次は他者により意図的に痛みを与えられ、持続的に苦しめられた例を紹介する。以下は、Islamic State：IS（イスラム国）に幽閉され、拷問を受けた写真家を取材したノンフィクション作品である『ISの人質 13ヶ月の拘束、そして生還』（2016年）からの引用である。

「両手を上げろ」アブ・フラヤはそう言いながら椅子の上に立つと、天井に取り付けたフックから鎖を引っ張り出し、手錠をつないだ。ダニエルの体は、完全に伸びきった状態になった。足の裏を床につけて立っているが、腕は天井へ向けてまっすぐ伸ばしたままだ。手錠の内側の泡が滴り落ち、鋭い鉄が手首に食い込む。——中略——手や腕の感覚は瞬く間になくなった。その代わりに、ひりひりするような痛みが絶えず体全体を貫いていく。——中略——そんな状態が続くと、やがて足元の石床の模様がぼやけ、生きもののよう見え始めた。床全体が毒虫に覆われている幻覚に襲われ、恐怖のあまり小便を漏らした。<sup>23</sup>

ISの拷問は暴力によって痛みを与えるだけでなく、吊り下げ、持続的に苦痛を与える方法を採用している。長時間吊り下げるとは拷問官の経験から口を割らせるために最も効果的な方法であるため採用されている。この写真家であるダニエルは水も食物も与えられないまま3日間吊り下げられた。長く吊り下げられるとその苦痛から幻覚を見る。痛みと乾きとしびれと疲労が持続的に続き、このような極端な苦痛は生きていることさえも嫌になるほどの身体と精神を痛めつける。

実は、被害者（ダニエル）には罪はなく（加害者のアブ・フラヤから見ると何かしらの罪があ

<sup>23</sup> ブク・ダムスゴー（山田美明訳）、『ISの人質 13ヶ月の拘束、そして生還』、光文社新書、2016、pp.119-120.

ると考えているが) 吊り下げられる理由がない。そして、このまま理由なく殺されるかもしれないと思いつけることは恐怖以外のなにものでもない。

### ③ 激痛

痛みの感じ方は様々であるが、その程度を、先に紹介した NRS (痛みの測定ツール) で表すと 0 を最小、10 を最大で表現した際に、激痛となれば限りなく 10 に近くなる。そのような痛みにはうめき声をあげるくらいしか抵抗できず、逃れることができない。痛みが恐怖を呼び起こし、身が震える。そのような痛みの表現を以下に示す。

「生命をひっぱたかれるような痛みを覚えて」有島武郎『或る女』(1919 年)

「地が裂けて熱い溶岩が流れ出したような恐ろしい激痛」三島由紀夫『憂国』(1961 年)

「産むときの肉体の痛みは、闇を裂いて稲妻が閃き、耳の傍で雷が落ちたのに似ている」有吉佐和子『華岡青洲の妻』(1967 年)

自身の身体が存在が失われてしまうかもしれないような痛みは、自然災害のようなどうしようもなさが表現されている。

文学において激痛は経験する者の視点からではなく、痛みを与える側から表現する場合もある。痛みや苦しみを表すのではなく、行為を通してそれを伝える。刺激を与えることで人間はどのように反応するか観察し、記述する。そこから「私の痛み」と「あなたの痛み」が相まって、心身の痛みが極まったイメージを賦活させられる。その例として中国の作家である莫言<sup>もおいえん</sup>の代表作『白檀の刑』(2001 年) から紹介する。

作品の前半の重要な処刑シーンとして凌遲<sup>りょうち</sup>五百の刑が書かれてある。時代は 19 世紀末から 20 世紀初頭に掛けてである。この処刑は罪人の身体を 500 回に渡り刃物でえぐり取り、最後の一刀で心臓を突き刺し死に至らしめる刑である。処刑人である趙甲はこの刑を執行することに職人的な思想と自尊心を持っており、決して最後まで殺さない方法でゆっくりと身体を切り刻む。

刑に処せられる錢雄飛<sup>せんゆうひ</sup>は政治犯であり、その政治的思想の強さから弱音を吐かず、刑の執行中でも相手を睨みつけ、胸の肉を 50 回削られ心臓や肺が外から見えるようになってもことばを漏らさなかった。

しかし、凌遲の刑では胸の肉のあとは男根を切り落とす決まりになっており、この刑を受ける殆どの罪人は心理的な恐怖と屈辱感からどんな凶暴な男も男根を切らせたがらない。錢においても同様であり、以下の場面に続く。

執行人が男根を切り取り落とし、それを地面に投げ捨て瘦せた犬がぐわえていった。「そのときである、それまで歯を食いしばって声を立てなかった錢雄飛が絶望<sup>はうこう</sup>の咆哮を発したのは。——中略——錢雄飛の咆哮は人間のものとも獣のものともつかず、身の毛のよだつようなそれ

だった」<sup>24</sup>。銭の激痛は身体ではなく、男根を切り落とされるという恐怖と屈辱で魂をかき乱されるのであった。咆哮の意味は獣などが吠えたけることであるが、そのときに銭があげた咆哮は人生の終わりを示しており、絶望そのものであっただろう。

この作品では、刑の酷さだけではなく、人間の根底にある自尊心が身体を切り裂かれ、奪い取られることによる激痛を表現している。銭の男根が切り取られたことによって悟った絶望感は、実存を脅かすような痛みを与えている。強い痛みだけでは無く、身体が失われるという経験が同時に起こったことが自己の存在そのものの喪失感と繋がり、絶望したのだと推察できる。

多くの例を挙げ、紹介したように痛みは多くの文学作品で表現されている。人間の基本感情は「関心、怒り、不安、悲しみ、喜び」<sup>25</sup>であるとされている。痛みは多くの場合、不安と強い繋がりを持つ<sup>26</sup>。不安は自己の深淵をのぞき込むように我々を誘い出す。痛みによって動けなくなるのではないか、死に至る病に冒されているのではないかと医学的な根拠に関係なく、感覚的・情動的な生に対する揺さぶりを受ける。文学の表現からその認識が思い出され追体験する。文学の作者は痛みの苦しみを読者に理解させ、経験に裏打ちされた感覚や情動を呼び起こし、その作品の場面に落とし込む。

しかし、表現された痛みを知ることで、他者の痛みを全て理解できることはない。例えば、刑死する銭雄飛の痛みを追体験できるほど、強い痛みを知る人は多くない。ただし、銭の痛みはわからなくとも、その恐怖は理解できる。そして、銭に訪れる死を読者は容易に予測できる。痛みの表現から、読者は想像し、その後に起こる影響を捉えることが物語の役割であろう。実際に文学の中では読者に痛みの状況や苦悩の様子を理解させるために比喩により痛みを表現する。本論で紹介した多くの痛みの比喩は我々の日常生活において使用されない表現である。

#### 4 痛みの表現——他者の痛みのためにできること——

ここまで、痛みの表現としてオノマトペと文学の中の比喩表現などからいくつかの例を拾い上げて紹介した。表現を取り上げる理由は痛みの共有可能性を探ることであった。概観した結果、オノマトペのように簡単な表現であれば、共有できるが、比喩表現の場合、壮絶な痛みや複雑な痛みであると理解できず、共有されるとは言いがたいことがわかる。つまり、共有できる痛みには幅や要素があり、様子を表すような情動を含まない感覚的痛みは共有できるが、情動を含んだ個人の経験に大きく修飾し痛みの共有が難しいと考えるべきだ。

痛む人は「心と身体、主観的と客観的、内的小および外的、精神的と身体的な根本的な二元性に根ざした唯一の根拠の基盤の枠組みの中で、痛みの経験は純粋に主観的な領域に縮小される」<sup>27</sup>。これは痛みの表現の難しさの根本理由である。エレン・スキャリーは痛みがことばを破壊すると

<sup>24</sup> 莫言（吉田富夫訳）、『白檀の刑（上）』、中公文庫、2010、pp.380-381.

<sup>25</sup> ルック・チオンビ（山岸洋ら訳）、『基盤としての情動 フラクタル感情論理の構想』、学樹書院、2005、p.70.

<sup>26</sup> 堀寛史、「痛みと心理的ストレスの関係性：症状化するストレスの脅威」、『藍野学院紀要』Vol.21、2007、pp.107-118.

<sup>27</sup> ibid.p.28.

述べているが、正確には主観の中にことばを押し込めてしまう（縮小する）のであろう。一度押し込めてしまった存在を掘り起こして、表現するために準備が必要であり、また、ことばをさがす時間と場が必要になる。本質的には病院やクリニックはその「場」になることができるであろう。

理学療法士にとって痛みは治療対象となる症状であり、その存在の不確定性が治療を困難にするため、治療方針によく悩まされる。2節で述べた「3つの側面」（言葉による痛みの表現、痛みに対する反応、痛みによる影響）のうち、痛みによる影響は個人の経験を修飾し、痛む意味を複雑にする。また、痛みは「認識可能な外部の身体的兆候を伴わない場合、苦痛は罹患者の「心の中」に存在するものとして容易に無視される」<sup>28</sup> ことがあり、他者から探し出せないが、存在している。そのような痛みは理学療法士にとっても対象者にとっても表現が難しく、共有が不可能である。だからこそ、痛みを表現する、表現を聞き取る際に、2者がお互いに落ち着き歩み寄るような場が必要となる。

痛みはいつも表現できるとは限らないのだが、前提として我々は同じような身体を持ち、同じように感じ、同じように考えると信じており、表現さえできれば誰かにわかってもらえんと考えている。理解がどこかで融合し、相互にわかり合えるとロマンティックとさえ思えるくらいに信じている。この他者と共通しているという認識が、痛みを表現する上で重要な要素である。そして、理学療法士にとって痛みの共有不可能性に、対象者へ手をさしのべるような意思が必要である。そこに痛みは無いと存在を無視するのではなく、押し込められた痛みの表現と一緒に探し出すのである。多くの人が、私だけが痛んでいる、誰も痛みをわかってくれないといった認識により孤立する。この孤立は自分一人の場を作り、個の情動を圧迫し、救いの無い世界でただ一人いるようになる。だからこそ、理学療法士は痛んでいる時の孤立感を緩和するように努める必要がある。表現を与えるといった手段を用いるべきである。その意味で痛みの表現を知ることは理学療法士にも対象者にとっても必要であると結論づけることができる。

（はりひろふみ 藍野大学医療保健学部理学療法学科）

---

<sup>28</sup> Lisa Folkmarson Käll, "Intercorporeality and the sharability of pain", Käll, Lisa Folkmarson (ed.) *Dimensions of Pain*, London & New York: Routledge, 2013, pp.28.

## Expression of Pain

Hirohumi HORI

Since pain is a sensory/emotional experience of an individual, it is ready to be shared with others only when it is expressed. Originally, pain is a personal sensory/emotional experience that can happen to anyone and should not be shared, but there is a possibility that expressing pain can provide a clue that helps a person to understand its meaning. In this paper, we focus on onomatopoeia and metaphorical expression and outline how pain is expressed.

When a person expresses pain, it is often expressed in onomatopoeia. Onomatopoeia is a phrase often heard in clinical situations, and onomatopoeia seems to be a culturally established expression as an effective means for mutual understanding of pain.

In literature, pain is expressed through a variety of metaphorical expressions. Pain often has anxiety and strong ties, and it invites us to peer into the abyss. There, we are shaken by our sensuous and emotional lives. I recall that recognition from the expression of literature and experience it. The author of the literature makes the reader understand the suffering of the pain, evokes the feelings and emotions backed up by experience, and puts it in the scene of the work.

It can be said that literature is an important element for understanding our own and others' pain, that expressions have meanings and help us know other people through stories. Pain is an individual experience, but as it is expressed in language as knowledge, the possibility of understanding others spreads. However, even if we use abundant expressions it is not easy to break through the impossibility of sharing pain. The interaction that is necessary is not simply to recognize that there is pain, but to search for its expression together, and to give voice to that expression. When expressing pain, when listening to expressions, a place where the two are calmly reconciled with each other is necessary.

「キーワード」

痛みの表現、オノマトペ、比喩表現、共有不可能性、感覚的・情動体験